

文知摺観音

2021. 12. 20

1 1月中旬の天気がいい日だった。思い立って文知摺観音に行ってみた。家人が行きたいといったのである。昔、経緯は忘れてしまったが、一度行ったことがあった。松尾芭蕉が「奥の細道」の旅の際に訪れ、句を詠んだことは知っている。

古くから和歌の題材とされた日本の名所旧跡のことを「歌枕」という。福島県の歌枕としては、白河の関や安達ヶ原などがある。信夫もその一つである。文知摺観音は、信夫にあたる。文知摺観音が、なぜ歌枕として有名なのかというと、小倉百人一首の地だからである。百人一首といえば、聞いたことがあるだろう。

個人的には、百人一首に、いい思い出がない。高校に入ってすぐに、国語の先生が「百人一首を覚えろ。テストをするから」それだけだった。テキストを買わされた。百人一首にどんな価値があって、なぜ覚える必要があるのかという説明がなかった。抵抗感しかなかった。百人一首の価値を知ったのは、教員になってからである。高校のときに、もう少し覚えておけばよかったと後悔したのは事実である。

小倉百人一首に選ばれたのは、古今和歌集にある源融の「みちのくの しのぶもちずり 誰ゆえに 乱れ染めにし 我ならなくに」という作品である。源融（みなもとのとおる）は、嵯峨天皇の子で左大臣であった。紫式部の「源氏物語」の主人公である光源氏の実在のモデルの一人ともいわれている。この地には、源融と村の長者の娘の悲恋物語が伝わっている。

家人と訪れた日は、穏やかな日中で、紅葉見物にはうってつけの日だった。だが、見頃は過ぎていた。もう一週前ならばベストだったかもしれない。紅葉とは、いつもタイミングが合わないものである。

それでももみじがきれいだった。葉っぱが小さいタイプのもみじでかわいらしかった。スカイラインに行かなくても、十分ゆっくりと紅葉を味わうことができる場所だった。一通り見てまわると、新たな発見がたくさんあった。

正岡子規の句碑があった。子規が来ていたことを知らなかった。沢庵和尚の歌碑があった。これも知らなかった。もちろん、芭蕉の句碑もあった。「早苗とる 手もとや昔 しのぶずり」である。

文知摺観音観光のメインは、「もちずり石」である。この石に源融の面影が浮かんだといわれている。私の中では、案外小さな石で、多少がっかりした記憶があった。ところが、もちずり石は大きかった。私の記憶はあてにならない。きっと、記憶の中で、どこかの石がもちずり石になってしまったのだと思う。

福島に住んでいながら、よくは知らないことがいっぱいある。文知摺観音も、その一つであった。今回は、行きたいといってくれた家人に感謝である。